



後編

09・町に一個しかないショッピングセンターで買い物デート

『08・二度目のデートにお誘い』の翌日。

とある年の夏。七月二十九日（水）十四時ごろ。

日本のとある、かなり寒い地域の田舎町。

天気は晴れ。気温は二十七度程度。

少し暑い、心地よい夏の昼下がり。

場所は、民宿からバスで三十分ほど行ったところにあるショッピングセンター。

主人公と弥映は、その中の一階にあるフードコートで、今遅めの昼食を終えたところだ。

——その前に、ここまで起きた出来事を振り返りたい。

まず、昨日の夜は素晴らしかった。

あの後二人は朝のラジオ体操のように並んで夕食をとり、その後は弥映の部屋に戻って仲良くデザートを食べ、食後のセックスをして。

それから汗と唾液と愛液でぐちゃぐちゃになった身体を、二人で洗いっこした。お風呂から上がった後は、きれいにした身体をお互いに拭きっこして、乾かし合って。クリームやパウダー、オイルを塗って整えっこして。

なのに、それからまた、一連の行為を全部無駄にするみたいに、朝までむさぼりあった。そんな昨日の夜は、主人公から積極的に迫った。

昨日とは真逆に、恥ずかしがる弥映を追い詰めて、思いつく事は全部やった。

その時の弥映は、とにかく可愛くて……。主人公は、今も思い出すだけでうっとりしてしまう。

昨日の弥映は、困っているようで、実際は期待でいっぱい表情を浮かべながら、おずおずとその身を差し出した。

そんな風に、攻められる側に回った弥映は、ひたすらいとおしくて。

主人公に全幅の信頼を寄せるように甘えて、頼って。

媚びた甘い声で、何度も主人公を呼びながら、すがりついてきた。

その時の事を主人公は忘れられない。多分、一生覚えていくだろう。

弥映がこんなにも弱い所をさらして、自分に心を許しているという事が、たまたまなく嬉しかったのだ。

夜明け頃、攻められるのにも慣れて、気安い雰囲気になってきてからの弥映もよかった。一晩中主人公に我が物顔で身体を触られて、敏感なところを徹底的にいじられ続けて、恥ずかしい声しか出なくなるまでイカされ続けても

『ばか……心』

と言いながら、全部許してくれるのは、ちよつと幸せすぎた。

だから外で鳥が鳴き始めて、ようやく疲れて眠ってしまう頃、主人公は確信した。

こんなかわいい人は他にはいない。

絶対自分が独占するし、絶対離さない。

それから理解した。これが恋だと。

これが恋じゃなければ、自分は一生恋を見つけれないだろうと。

主人公はこの夜、ただ受け身でいる時には見えなかったものを、たくさん見た。

弥映に、自分の望む事をして尽くしてほしいと思う以上に、なんでもしてあげたいと思う事。

たとえば年上だとか、セックスについて自分よりよく知っているとかが、そういう、強い部分に頼りたいと思っただけは、必ずしもいいものではない。

いつの間にか、弥映の自分に自信のなさそうなのとか、甘えん坊で淋しがりで、密着するのが大好きなところだとか。

そういう、弱くてかわいい部分を、たっぷり甘えさせてあげたくなる事。

だから、すぐに不安がる弥映には、安心して眠れる位、ありったけ優しくしたい。

なのに、同時に、息をつく間もない位いじめ抜いて、泣くほど気持ちよくさせたいと思ってしまう事。

こんな風に、矛盾する強い感情に、振り回される事こそが恋だと。

眠る直前、弥映がふにやふにやになった身体でびったり寄り添って

『絶対手え離さないでね。お手洗い行く時だって、起こしてね』

と猫撫で声で言った時、主人公は万能感に包まれた。

もちろんそうする、それ以外の事だって全部する。

弥映に必要とされている限り、自分は何でもするし、できると。

つまり、これからの自分はきつと何でもできる。

弥映の最高の恋人になって、弥映を生涯幸せにできると、本気で思った。

——それが、数時間前までの主人公だ。

今もその気持ちが続けばよかったのだが。

……だって、外に出たらわかってしまった。

自分は『弥映の最高の恋人』どころか、弥映よりもずっと年下の無力な女子学生に過ぎない。

つまり、他者と競った時、勝てる見込みがない事の方が多いと。

だって、民宿を出てバス停に向かって、一緒にバスに乗る頃には理解した。

想像していたよりも、ずっと弥映は目立つのだと。

たくさんの人を惹いて、様々な視線で見られている、素敵な女性なのだ。

そこでは年老いた人も、学生も、男も、女も弥映を見ていた。

単純によそ者が目立つというだけの事なら、主人公も同様に注目されるはずだ。

でも、視線が集まっているのは、明らかに弥映の方だった。

それだけ彼女が美しく、魅力的な体型をしていて、耳を傾けなくなる声をしているという証だろう。

それでも、これで終わるのならまだいい。主人公はもっと重要な事にも気づいてしまった。た。

いくら弥映が主人公に親しげにして、主人公がそれに応えて。手を繋いで歩いたって……。

誰も自分達を恋人同士だなんて思わない。

自分達はどう転んだって、せいぜい『仲のいい姉妹』程度にしか見えないのだと。

こんなの、最初からわかりきった事だった。

それでも、主人公は思った。

今朝までみたい伯父伯母の民宿という自分のテリトリーで、与えられた客室という、狭い場所で。

小さな水槽で、たった二匹で暮らす金魚みたいに、お互いだけを見つめたままでもいられたら、どんなによかっただろう……。と。

そうしたら自分はきつと今も『自分こそが弥映にふさわしい』と思いついで、どんな甘

言葉も、行動も、いくらでも言えて、できただろうと。

だけど今はそうする自信がない。

急に自分が滑稽に思えて、どんな真剣な言葉も『恋人気取り』のたわいないものに聞こえてしまいうさそう。

怖くて、できなくなりそうなのだ……。

だけど、そんな主人公の気持ちに、弥映は気づいていないのだろう。

今もとても幸せそうで、満足げだ。

それはとてもいい事だ。いい事なのだが……。

※音声ここから※

SE1 ショッピングモールのフードコートの際音

【最初から最後まで流す】

【繰り返し流す】

● 中央



「上機嫌のため息をつく」

はー………♥

【少し間をあけてから】

いっぱい買ったねえ♥

もうこれでしばらくは大丈夫だな。

【少し間をあけてから】

そしたら。欲しいものは皆（みんな）買えたし。もう少ししたら帰ろっか」

〈主人公〉

「よかった」

主人公、複雑な想いを抱えながらも、上機嫌の弥映に優しく微笑みかける。

そうだ。弥映が楽しそうなのは喜ばしい事だ。

実際、買い物自体は順調に進んだ。

主人公は問題なく民宿からショッピングセンターまでを案内できたし、買い物中にトラブルが起きる事もなく、たとえば昼食の店選びに失敗するとか、欲しいものがまるで見当たらないとかといった、気まぜくなる要因すらなかった。

だから……今朝から今まで、主人公がずっと己の『現実』のようなものを思い知らされ続けた事以外は、とても楽しかったのだ。

……ただ、気になる事はある。

〈主人公〉

「……でも、弥映ちゃん。靴は買わないの？」

主人公、先ほどから気になっていた事を切り出す。

そうなのだ。弥映は今も、主人公がプレゼントしたサンダルを履いている。

正直なところ、それは安物だ。

履いて行ける範囲は、せいぜい家からコンビニ、あるいは近所のスーパーあたりが関の山だろう。

弥映のコーディネートの中でも浮いているし、これを気にしていないのは、おそらく弥映自身だけだと思われる。

だけど……。

● 中央

「上機嫌であっさり」と。

『もう満足しているの、そのつもりは最初からない』という感じで

んー？ 靴はいいよ。あんたがくれたのがあるもん♥

【少し間をあけてから】

はあ。すっごい楽しかった。

バス。田舎の古い奴だって言うから『どんなのよ』って思ってたのに。可愛かったね。

エアコン効いてるから、ずっと手繋いで乗れたし。

【少し間をあけてから】

繋いでいる手に目をやって、軽く振ってから話すイメージで  
今も繋いでるけど。ふふふふ。

【少し間をあけてから】

ドキドキしながら切り出す、なかなか全部言えない  
で、ね？ あの……」

そうだ……。

主人公、弥映が何か言いたげなものには気づかないまま、思う。

そうだ。今日は弥映ちゃんがずっと手をつないでいてくれたから、何とか私は己を保つ事ができた。

弥映ちゃんのあつたかくてふにふにの手に、自分の手をぎゅっと絡めながら、

『私は、弥映ちゃんに必要とされている』

『たとえ他の人からどんな風に見えても、弥映ちゃんは、私の事を恋人として扱ってくれている』

そう思えたのだ。

だからこそ、私はまだここで終わっちゃいけない。

周りの人が私をどう見るかなんて、全然重要じゃない。

弥映ちゃんが私をどう見てくれるか。それが大事だと思うのだ。

だから、主人公は今、あえて弥映の手を離す事にする。

やるべき事があるからだ。

〈主人公〉

「あの。弥映ちゃん。その、手なんだけど」

●中央

「【自分も話したい事があるが、主人公が先に話し始めたので、先に聞く事にする】  
うん？」

「【上機嫌で。】

主人公がこれから『手を離していいか』と言おうとしているなど考えもしない】  
うん♥ お店涼しいからずっと繋いでられるね♥」

〈主人公〉

「離してもいい？」

●中央

「【あからさまにショックを受けて】

※大げさな印象にならないようにお願いします※

へ？　なんで？」

主人公が切り出すと、弥映はあからさまにショックを受けた顔をする。

主人公は、それがとても嬉しかった。

弥映の事が可愛くて、今すぐ抱きしめたい衝動にかられる。

ここが民宿なら、とつくに抱きついてキスをしていただろう。

だが、そうはせず立ち上がり、弥映にこう告げる。

〈主人公〉

「実は、お手洗いにいきたくて……」

● 中央

「※マークまで、すんなり納得して。」

『なんだ、そういう理由なら仕方ないか。どうぞどうぞ』と言う感じで

あ。お手洗い。なるほどね。

【少し間をあけてから】

そりゃ、このままじゃ行けないよね。

【少し間をあけてから。一瞬『あたしも行こうかな』と言おうとするが、

『荷物もたくさんあるし、それは現実的ではない』と判断する】

わかった。

じゃあ、荷物もあるしここで待ってる。

いってらっしゃい」※

理由を告げると、弥映はすんなり納得したようだ。  
両手を振り、主人公を笑顔で見送ってくれる。

〈主人公〉

「ありがとう。じゃあ、ごめん。ちょっと待っててね」

……できるだけ、早く戻ってこよう。

主人公、そう思いながらフードコートを去る。

SE2 主人公の足音

【最初から最後まで流す】

【だんだんフェードアウトする】

一度フェードアウトする。

フェードアウトした後、5秒ほど空白の時間を流し、またフェードインする。

■ ※ここから次の「■」マークでくくった部分は音声化しない※

主人公、速足でフードコートから離れると、お手洗いのある百円ショップ横ではなく、エスカレーターに向かって、二階へと急ぐ。

二階にもお手洗いはあるが、目的地はそこではない。そもそも『お手洗いに行く』という事自体が嘘だ。

主人公は今、弥映の靴を買いに、靴店へ向かっているのだ。

……実を言うと、少し目星は付けていた。

なぜなら、今弥映が履いているサンダルも、実は二日前に主人公がここで買ったものだからだ。

つまり、この靴店に置いているものは、何となく把握しているのである。

主人公、少しでも早く弥映の所に戻るため、わき目もふらずに靴店まで向かうと、狙っていた靴を探し始める。



……よかった。あった。

なかったら、本当にお手洗いって事にして戻らなきゃいけないところだった。

それはすぐに見つかり、主人公はホツとして息をつく。

だが、安心するのはまだ早い。

今度は、きちんとサイズがあるかを確認しなくてはならない。

それでも、欲しいサイズはわかっている。

二十四センチだ。

——あの時、弥映ちゃんの靴のサイズを聞いて本当によかった。

サンダルは漠然とMサイズだ。

だから、もし聞けないままだったら、私はあの壊れた靴を、こっそり覗き見るしかなかったと思う。

主人公、無事に二十四センチがある事を確認して、今度は二色あるうち、どちらにするかで迷う。

時間はかけられないが、選ぶ行為自体はとても楽しい。

胸がわくわくする。

……どっちも、弥映ちゃんに似合うと思う。

でも、より今日の服装に合ってると思うのは、こっちの色、かな。

主人公、この靴を履いた弥映の姿を想像すると、心が弾む。

弥映が『ありがとう』と笑って、はしゃいで、跳ねるように歩いているところを思い浮かべるだけで、胸がいっぱいになる。

その気分のまま選んだ方の色を取り、レジへ向かう。

だが、問題は……。

〈店員〉

「三千三百円でいっせいです」

……この靴が、決して高価とは言えないところだ。

もちろん、値段がすべてじゃない事はわかっている。

現に、この靴のデザインはとってもいいと思う。

値段相応の部分も確かにあるだろうが、値段以上に品があって、可愛らしいし、何より弥映に似合うと思う。

……でも、それは主人公の価値観だ。

弥映が、主人公と同じように思ってくれるとは限らない。

ただでさえ、とても気を遣う人だ。

おそらくあまり気に入らなくても、弥映は笑って『ありがとう』と言ってくれるだろう。『その気持ち嬉しい』と、主人公を抱きしめてくれるだろう。

でも、心の奥底では

『ああ、年下女がプレゼントしてくれるものなんて、所詮この程度か』  
と、がっかりするかもしれない。

これを機に目が覚めて、主人公との関係を見直そうと考えるかもしれない。

主人公はそれが怖かった。

——だって、たとえば主人公があと十歳大人だったなら、一桁多い額のプレゼントだってできる。

でも、今はできない。無理だ。そんなにお金を持っていない。年が離れているとはそういう事だ。『今できない事』が、多すぎる事なのだ。

〈主人公〉

「……あ。プレゼント包装、お願いします」

〈店員〉

「かしこまりました」

この店員だって、今、どう思った事だろう？

せいぜい家族か、友達へのプレゼントだろうと思うはずだ。

恋人として、年上の大人の女性にプレゼントするのがこの価格帯の靴だなんて、思わないだろう。

……途端に自信がなくなってくる。

自分はこの靴を素敵だと思ったし、弥映に似合うと思ったから買う。

だからそれだけでいいのに、今は値段の事ばかり気にしている。

まったく自分らしくない。

まったく自分らしくないのに『自分とはこの程度の人間だ』と思い知らされているように、胸が苦しい。

主人公、思う。

……なんだか今日は、自分の限界を感じる事ばかりだ。

弥映ちゃんの自慢の恋人になりたいのに、目につくのは無力で何も持っていない自分ばかり。

たとえば私が、今とは真逆の『弥映ちゃんより年上の、すぐくお金を持っている男性』とかだったら違うのかな。

なんて、考えてもしょうがない事を考えてしまう……。

……でも、これを手渡して、弥映ちゃんが喜んでくれたら、私はきっと自信が持てる。弥映ちゃんが私を支えてくれる。

だって私達は恋人なんだから。

ちよつと普通じゃない形で始まった関係でも、今は本気だから。

この夏が終わったって、きっと付き合い続けられるって。

少なくとも私はそのつもりだって、言うんだ。

そんな事を考えているうちに、包装が終わったようだ。  
店員がにこやかに話しかけてくる。

〈店員〉

「お待たせいたしました。こちら商品でございます。

お買い上げありがとうございます」

〈主人公〉

「ありがとうございます……！」

こうして主人公は包装された靴を受け取ると、すぐに鞆にしまい込む。  
新しい包みを持っている事を、弥映に見つかってはいけない。

このために今日は大きめの鞆で来たのだ。

そして、再び速足でフードコートへ向かう。

よかった。買った。

よし、これで大丈夫。

私はこれから、弥映ちゃんにサプライズプレゼントをする。  
それから、もう一回、真剣に告白する。

そしたらきつと、私達、もっと深い関係になれると思う。  
そしたら、そうしたら……。

こうして、主人公がフードコートに戻ると……。

■ ※ここまで音声化しない※

ここから、もう一度SEEがフェードインして流れる。

● 中央 少し遠い

「あからさまにホツとして」

あ………！」

弥映が、見知らぬ男性に声をかけられていた。

………えっ。

なに。何、あの人。

主人公、目の前の光景が理解できずに硬直していると、すぐさま弥映が近づいてくる。

SE3 弥映の足音

【最初から最後まで流す】

【小さめの音量で流す】

【だんだん近づいてくる】

弥映との距離が近づく。

● 中央

「【あからさまにホツとして】

よかった、やっと来た。

【男に向かって言っている。主人公と話している時と比べて、声が明らかに冷たい】  
じゃあ、そういう事なんで、すみません」

弥映、主人公の手を握ると、左耳に耳打ちする。



●左 ささやき ※マークのセリフまでささやく

「耳打ちする」

行こ」※

ここでSE1がフェードアウトする。

弥映、主人公の手を取ると、説明もなしに、すぐさま歩き始める。説明がないのはいい、何が起きたのかはおおむねわかっている。でも……。

——あまりにも嫌なものを見てしまった。

弥映に声をかけていたのは、まさしく自分とは真逆の『年上』の『男性』で……。明らかに、主人公よりも『お金を持っていそうな』人だったからだ……。

SE4 弥映の足音2

【最初から最後まで流す】

【小さめの音量で流す】

足音が止まってから5秒ほど沈黙。

● 中央

「【※マークまで、うんざりして】

※『声をかけられて嬉しかった』と言う印象には、まずならないようにお願いします。※  
はあ……あの人。しつこくて……。

一人になった途端、急に声かけてきてさあ。

【誤解されたくない。きちんと自分たちの関係を伝えた事を主張したい】  
付き合ってる人、待ってるって言ったのに。

全然いなくなんないの」※

〈主人公〉

「……そっか」

主人公、それを聞いて顔が引きつる。

考えなくてもすぐにわかる。弥映が声をかけられたのは、自分が不在だったからだ。いくら弥映が魅力的でも、同行者がいれば近寄ってこなかっただろう。

自分が離れていたせいで、弥映に嫌な思いや、不安な思いをさせてしまった。申し訳なくて、泣きそうになる。

〈主人公〉

「弥映ちゃん、大丈夫だった？」

何か嫌な事とかされたり、言われたりしなかった？」

● 中央

「※マークまで、優しく。主人公を安心させたい。主人公の気持ち嬉しい。それに、実際問題何もされていない。

だから『嫌な事があるとしたら、あんたがなかなか戻ってこなかった事だよ』という言葉を読み込む」

ん？

大丈夫だよ。なんかされた訳じゃないし。 ※

【少し間をあけてから。

少しぐったりして。また先ほどの男性と遭遇するかもしれないと思うと、嫌でたまらない】

でも、しばらくどっか隠れてた方がいいかな。

このまま出ても、また会っちゃうかもしれないし」

それでも、弥映の声は明るい。

主人公を心配させまいとしているのだろう。

気を遣われるべきは弥映の方なのに、実際は主人公が弥映に気遣われている。

主人公はますます胸が苦しくなったが、それでもまだできる事はある。

主人公は何度もこの街に来ている。「邪魔者」を回避する手段だって持っているのだ。

〈主人公〉

「……そしたら、ちょっと離れた所まで歩いてみる？」

それで、帰りは行きとは違うバス停から帰ろうよ」

● 中央

「【驚く。その発想はなかった】

へ？

【主人公の提案を噛み砕いて、復唱する】

あ、帰りは乗るところずらして、行きとは違うバス停から乗ろうって事？」

〈主人公〉

「そう。まだ昼間だし、その方が安心だと思う。

この辺の事なら、私結構わかるし」

主人公はこの時、弥映に主張したかった。

自分は、あの男性よりも優秀だと。

周囲には恋人と認識されなくても。年下でも、お金も持っていないなくても。自分は誰よりも弥映を想っているし、弥映の役に立つと。

● 中央

「声が少し明るくなる。主人公が自分の事を考えてくれたのが嬉しい」  
いいね。そうしよう。

【気を取り直して】

なんか、探検って感じだね。

行こ！」

〈主人公〉

「……………うん！」

SE5 弥映の足音3

【最初から最後まで流す】

【だんだんフェードアウトする】

だから主人公は弥映の手を取り、ろくな確認もせずに歩き出す。

もしもこの時、主人公がもっと冷静だったなら、まずはスマホを開いていたはずだ。どのバス停に向かうかきちんと話し合って、それから外へ出ていたはずだ。

それなのに、今は一刻も早くここから離れたくて、思いつくままに足を進めてしまう。

……それが、今日を大きく変えていく。

ここでフェードアウトして終了。